

「雷峰怪蹟」試訳

丸井 貴史

【凡例】

- 一、底本には、北京市・首都図書館蔵の金陵王衙蔵板本を用いた。本文は康熙十二年刊本に一致。
- 二、本文は原則として底本どおりに翻刻したが、以下の点に配慮した。
 1. 文字は原則として日本における通行の字体に統一した。日本において用いられない漢字については、底本のままとした。
 2. 句読点や「」は、批点等を参考にして私に附した。また、段落分けは私に施した。
 3. 誤字は改め、その都度注記した。
- 三、訳文は必ずしも直訳を志向しているわけではないが、可能な限り原文に忠実に、かつ内容を分かりやすく表現するよう努めた。

【本文・訳文】

嘗思聖人之不語怪、以怪之行事近乎妄誕而不足為訓、故置之勿論。然而天地之大、何所不有？荒唐者固不足道、若事有可稽、蹟不能泯。而彰彰於西湖之上、如雷峰一塔、考其始、実為鎮怪而設、流伝至今、雷峰夕照已為西湖十景之一、則又怪而常矣。湖上之忠墳・仙嶺、既皆細述其事、以為千古快瞻。而怪怪常常、又烏可隱諱而不傾一時之欣聽哉？

かつて、聖人が怪を語らぬのは、怪異というものはほとんど妄誕で教訓とするに足らぬからだと考えていた。しかし天地は廣大であり、あらゆるものがそこにはある。荒唐無稽なもののもとより語るに足らぬものであるが、もしもその出来事が少しでも考えるべきものであるならば、その痕跡が消えることはない。西湖の上にその跡を残している雷峰塔は怪異を鎮めるために建てられたもので、それが今日まで伝わって「雷峰夕照」が西湖十景のひとつとなつてゐるのは、「怪」にしてまた「常」ともいえることである。湖上の忠墳・仙嶺についてはすでに詳しく述べられており、長く親しまれてきた。しかし、「怪」にして「常」なるものにもまた、ひとときの間、耳を傾けるべきではなからうか。

你道這雷峰塔是誰所造？ 原来宋高宗南渡時、杭州府過軍橋黒珠巷内、有一人、叫做許宣、排称小乙。自幼兒父母双亡、依傍着姐夫李仁、現做南廊閣子庫募事官、的家裏住、日間在表叔李将仕家生菓鋪中做主管。此時年纔二十二歳、人物也還算得齊整的。是年恰值清明、要往保叔塔寺裏薦祖宗、燒窆子、当晚先与姐姐說了。次日早起、買些紙馬・香燭・経幡・錢垛等物、喫了飯、換了新衣服、好鞋襪、把窆子、錢馬使条袱子包好、徑到官巷口李将仕家来道「小姪要往保叔塔追薦祖宗、乞叔叔假一日」。李将仕道「這也是你孝心、只要去去便回」。

その雷峰塔を誰が造つたかということをご存知だろうか。宋の高宗が南渡された折、杭州の過軍橋黒珠巷に許宣という名の若者がいた。彼は幼いころに両親を亡くしたので、姉の夫で南廊閣子庫の募事官をしている李仁という人物を頼つて彼の家に住み、昼間は叔父である李将仕の生菓店で番頭を務めていた。このとき年齢は二十二歳で、整つた顔立ちをしていた。この年の清明節のと

き、許宣は保叔塔寺へ行って祖先の追善と焼香をしようと思ひ、その晩まず姉にそのことを話した。そして翌朝早起きして紙馬・香燭・経幡・錢塚などを買い、食事をしてから新しい衣服を着て、よい靴下や靴を履き、箆子と錢馬を風呂敷に包み、まっすぐ官巷口の李将仕の家に行つてこう言った。「私は保叔塔に行き、祖先の追善をしようと思つています。一日のお休みをいただけませんか。うか」。李将仕は「孝行な心がけだ。行つて早く帰つてきなさい」と答えた。

許宣離了鋪中、出錢塘門、過石函橋、徑上保叔塔。進寺却撞着送饅頭的和尚、懺悔過疏頭、燒了箆子、到大殿上隨喜、到客堂裏喫罷齋。別了和尚、還想偷閑各処去走走。剛走到四聖觀、不期雲生西北、霧鎖東南、早落下微微的細雨來了。初還指望他就住、不意一陣一陣、只管綿綿不絕。許宣見地下湿了、難于久待、只得脱了新鞋新襪、卷做一卷、縛在腰間、赤着脚、走出四聖堂來尋船。正東張西望、恐怕沒有、忽見一個老兒搖着一隻船、正打面前過。連忙一看、早認得是熟認的張阿公、不勝歡喜、忙叫道「張阿公、帶我到涌金門去」。那老兒搖近岸來、見是許宣、便道「小乙官、着雨了、快些上船來！」

許宣は店を離れて錢塘門を出ると、石函橋を渡り、まっすぐ保叔塔に行つた。寺に入ると饅頭を送つてくれた僧に出会い、祈祷書を供え、箆子を焼き、本堂に参拝し、客間でお齋を食べた。僧と別れた後、彼は油を売つてあちこち回ることにした。四聖觀に着くとすぐ、不意に西北から雲が起こり、東南の方角には霧が立ち込め、早くも細かな雨が落ちてきた。はじめはすぐやむかもしれないと期待していたのだが、はからずも雨は降り続き、いつまでもやむことはなかった。許宣は地面が濡れるのを見て、長くは待つておられず、新しい靴と靴下を脱いで腰に巻きつけて、裸足のまま四聖觀を飛び出して、船を求めろしかなかった。周囲を見回しても船はいないと思つていたところへ、一人の老人が船を漕いで前を通り過ぎるのが見えた。急いで見るとよく知っている張じいさんだということがわかつて嬉しくなり、急いで「張じいさん、私を涌金門まで連れて行つておくれ！」と叫んだ。老人は岸へ近づいてきて、許宣を見て「坊っちゃん、雨に濡れなかつたね。早く船にお出でなさい」と言った。

許宣下得船、張老兒搖不得十余丈水面、只聽得岸上有人叫道「塔了我們去」。許宣看時、却是一個戴孝的婦人、一個穿青的女伴、手中捧着一個包兒、要塔船。張老兒看見、忙把船搖攏道「想也是上墳遇雨的了、快上船來」。那婦人同女伴上得船、便先向許宣深深道了個万福。許宣慌忙起身答禮、隨掇44身半辺道「請娘子艙中坐」。那婦人進艙坐定、便頻把秋波偷瞧許宣。許宣雖説為人老實、然見了此等如花似玉的美人、又帶着個俊俏的丫鬟、未免也要動情。正不好開口、不期那婦人轉先道「請問官人、高姓大名？」許宣見問、忙答道「在下姓許、名宣、排行小乙」。婦人又問道「宅上何処？」許宣道「寒舍住在過軍橋黑珠巷、舍親生藥鋪內做些買賣」。説完、就乘機問道「娘子高姓、潭府那裏？」亦求見示。那婦人答道「奴家是白三班、白殿直之妹、嫁了張官人、不幸亡過了、現葬在這辺。因今日清明、墳上祭掃而回、不期又值此雨。猶幸遇塔得官人之船、不至狼狽」。

許宣が船に乗り、張老人が十丈あまりも漕がないうちに、岸の上で人が「私を乗せて行つて下さい」と叫んでいるのが聞こえた。許宣が見ると、喪服を着た女性と青い服を着て荷物を持った女中がおり、船に乗りたいたいと言っているのである。張老人はそれを見ると急いで船を近づけて、「墓参りをなさつて雨に降られたようですね。早くお乗りなさい」と言った。その婦人は女中と船に乗り、まず許宣に向かつて深々とお辞儀をした。許宣は慌てて身を起こして答礼し、身をすくめて「どうぞ中の方へお座りください」と言った。その婦人は船の中へ進んで座り、しきりに許宣へ秋波を送っていた。許宣は生真面目な性格であつたが、この花にも玉にも似た美人を見て、しかも器量の

よい少女を連れていたので、心が動くのを押さえられなかった。口もきけずにいると、期せずして婦人が先に「お名前は何とおっしゃるのですか?」と話しかけてきた。許宣は問われて、慌てて「姓は許、名は宣と言いまして、長男です」と答えた。婦人はまた「お宅はどちらですか?」と尋ねた。許宣は「家は過軍橋の黒珠巷にあります。親類の家の生薬店で商売しております」と答え、言い終わると機に乗じて「奥様のお名前は何とおっしゃって、お住まいはどちらですか? ぜひお教えください」と言った。婦人は「私は殿直である白三班の妹で、張氏に嫁ぎましたが不幸にも先立たれまして、今はこのあたりに埋葬しております。今日は清明節ですので墓参りをしまして、帰ろうとしたときにあいにくこの雨に遭ってしまったのです。幸いにもあなた様の船に乗らせていただいで、困ったことにならずに済みました」と答えた。

彼此説些閑話、不覺船已到了涌金門。将要上岸、那婦人故作忸怩之状、叫侍兒笑對許宣說道「清早出門得急了、忘記帶得零錢在身邊。欲求官人借應了船錢、到家即奉還、決不有負」。許宣道「二位請便、這小事不打緊」。因腰間取出付了船家、各自上岸。岸雖上了、雨却不住。恐天晚了、只得要各自走路。那婦人因對許宣說道「奴家在薦橋双茶坊巷口、若不棄時、可到寒舍奉茶、並納還船錢」。許宣道「天色已晚、不能久停、改日再來奉拜罷」。說過、那婦人与侍兒便冒雨去了。

話をしているうちに、船は涌金門に着いた。岸に上がろうとしたとき、婦人はことさら恥じ入った様子で連れの少女に、許宣に対して「朝早く急いで出かけましたもので、お金を忘れてきてしまいました。船の代金をお貸しただけませんかでしょうか。家に着きましたらすぐにお返ししたいと思います」と言われた。許宣は「お気になさらないでください。大したことはありませんから」と言つて懐から金を取り出して船頭に支払い、それぞれ岸に上がった。しかし岸には上がったものの、雨はやまない。それでも空が暗くなつてはいけけないので、それぞれ帰らなければいけない。婦人は許宣に「私の家は薦橋の双茶坊巷口にあるのですが、もしよろしければいらつしやつてお茶でも召し上がつていただくさい。船代もお返しいたします」と言つた。許宣は「もう遅いので長くはお邪魔できませんから、後日また伺います」と答えた。婦人は少女と一緒に、雨の中を帰つていった。

許宣忙進涌金門、從人家檐下、挨到三橋子、親睦家、借了一把傘、正撐着走出洋壩頭、忽聽得有人叫道「許官人慢走」。忙回頭看時、却原是搭船的白娘子、独自一人立在一個茶坊屋檐下。許宣忙驚問道「娘子如何還在此?」白娘子道「只因雨不住、鞋兒都踏湿了、因叫青兒回家去取傘和脚下、又不見來。望官人傘下略搭几步兒」。許宣道「我到家甚近。不若娘子把傘帶去、明日我自來取罷」。白娘子道「可知好哩。只是不当」。許宣遞過傘來与婦人、自去方沿人家門檐下冒雨而回。到家喫了夜飯、睡在床上、翻來覆去、想那婦人甚是有情。忽然夢去、恰与日間相見一般。正在情濃、不覺金鷄三唱、却是南柯一夢。正是

心猿意馬馳千里 浪蝶狂蜂鬧五更

許宣は急いで涌金門に入り、人家の軒下を通つて三橋子の親戚の家まで行き、傘を借り、それをさして洋壩頭を出たところ、不意に誰かが「許さま、お待ちください」と呼ぶのが聞こえた。慌てて振り返ると、先ほど船で一緒になった白娘子が一人で茶坊の軒下にたたずんでいる。許宣が驚いて「どうしてまだここにいらつしやるのですか?」と聞くと、白娘子は「雨がやまないせいで靴がすつかり濡れてしまいましたので、青青に傘と雨靴を取りに家に戻らせただけですが、まだ戻つてこないのです。どうか傘に入れて行つただけませんか」と言つた。許宣が「私の家はすぐ近くです。どうぞ傘をお持ちになつてください。明日、返していただきに伺います」と言うと、

白娘子は「もちろん私はそれで結構ですが……申し訳ありません」と言った。許宣は傘を婦人に手渡し、自分は人家の軒下を伝つて、雨に濡れながら帰った。家について夕飯を食べ、眠りについた床の上で何度も寝返りを打ち、あの婦人のことを想っていた。すると夢の中に、あたかも昼間に出会ったときと同じような情景が現れた。愛情が濃やかなそのとき、不意に雄鶏が三度鳴いたが、これこそ南柯の夢である。まさに、

猿と馬は千里を駆けて 蝶々と蜂は朝まで騒ぐ。

許宣天明起来、走到鋪中。雖說做生意、却像失魂一般、東不是西不是。挨到喫過飯、便推說有事、便走了出来、遂一徑往薦橋双茶坊巷口尋問白娘子。問了半晌、並沒一人認得。正東西躊躇、忽見丫鬟青兒從東边走來。許宣見了、忙問道「姐姐、你家住在那裏？」青兒道「官人我隨來」。遂引了許宣、走不多路道「這裏便是」。許宣看時、却是一所大樓房、對門就是秀王的府牆。青兒進門、便道「許官人、請裏面去坐」。許宣遂隨到中堂、青兒向內低声叫道「娘子、許官人在此」。白娘子裏面応道「請許官人進來奉茶罷」。許宣尚遲疑不敢入去、青兒連催道「入去何妨？」

許宣は朝起きると店へ行ったが、商売をしてもまるで魂を失ったようで、そわそわして落ち着かない。食事が終わるまで辛抱すると、用事があると言つて店を出て、まっすぐ薦橋の双茶坊巷口へ白娘子を探しに行った。しかし、白娘子の家の場所を人に尋ねてみても、一人も知っている人がいない。うろろろしているところへ、女中の青青が東からやってきたので、許宣はそれを見て、急いで「もしもし、あなたの家はどこにありますか？ 傘を取りにきたのですが」と聞いた。青青は「旦那さま、私についてきてください」と言つて許宣を引つ張つていき、どれほども行かないうちに「ここです」と言った。許宣が見るとそこは大きな建物で、向かいにあるのは秀王の邸宅である。青青は門に入り、「旦那さま、どうぞ中にお座りください」と言った。許宣がそれに従つて客間に入り、青青が中に向かって小さな声で「奥様、許さまがいらっしゃいました」と呼びかけると、白娘子が中から「中にお入りいただいてお茶を差し上げなさい」と返してきた。許宣がなお入るのをためらっていると、青青は「どうしてお入りにならないのですか？」と促した。

許宣方走到裏面、只見兩邊是四扇暗榻子窓、中間掛着一幅青布簾。揭開簾兒入去、却是一個坐起、卓上放一盆虎鬚菖蒲。兩旁掛四幅名画、正中間掛一幅神像、香幾上擺着古銅香炉花瓶。白娘子迎出来、深深万福道「夜来遇雨、多蒙許官人応付周全、感謝不尽」。許宣道「些微何足掛齒？」一面獻茶。茶罷、許宣便要起身。只見青兒早捧出菜蔬果品來留飲。許宣忙辭道「多謝娘子厚情、却不当取擾」。略飲了數杯、就起身道「天色將晚、要告辭了」。白娘子道「薄酌不敢苦留官人。但尊傘昨夜舍親又轉借去了、求再飲幾杯、即着人取來」。許宣道「天晚、等不得了」。白娘子道「既是官人等不得、這傘只得要求官人明日再來取了」。許宣道「使得、使得」。遂謝了出來。

許宣が中に入っていくと両側に四面の網戸窓があり、真ん中に青い帳が掛かっている。帳を上げて入ると居間があり、机の上には虎鬚菖蒲の鉢植えが置いてある。その両側には四幅の名画が掛けられ、真ん中には一幅の神像が掛かっており、さらに香机の上には古い銅の香炉花瓶が置かれている。白娘子は出てきて深々とおじぎをし、「昨夜は雨に遭つて、たいへんお世話になりました。お礼のいたし方がありません」と言った。許宣が「大したことはありません」と言うと、白娘子は茶を勧めた。お茶が終わると、許宣は帰ろうとしたが、それを見ると青青は料理と果物を持ってきて、許宣を引き留めた。許宣は急いで辞退して、「お心遣いありがとうございます。しかしこれ以上ご迷惑をおかけできません」と言い、酒を数杯飲むとすぐに身を起こして「もう遅くなりまし

た。おいとましなければなりません」と言った。白娘子は「粗酒ではこれ以上お引き留めできませんね。ただ、傘は昨夜、親戚が借りていつてしまいました。もう何杯かお飲みください。すぐ取りに行かせます」と言ったが、許宣は「もう遅いですから、それまで待てません」と言った。白娘子が「お待ちいただけないのでしたら、明日また取りにきていただくなければなりません」と言うと、許宣は「よろしいですよ」と言い、札を述べて帰った。

到了次日、在店中略做做生意、便心痒難熬、只託故有事、却悄悄地又走到白娘子家來討傘。白娘子見他來早、又備酒留飲。許宣道「為一把破傘、怎敢屢擾？」白娘子道「飲酒飲情、原不為傘。不妨飲一杯、還有話說」。許宣喫了數杯、因問道「不知娘子有何話說？」白娘子見問、又斟了一杯酒、親自送到許宣面前、笑嘻嘻說道「官人在上、真人面前不敢說假話。奴家自亡故了丈夫、一身無主、想必与官人有宿緣。前日舟中一見、彼此便覺多情。官人若果錯愛、何不尋個良媒、說成了百年姻眷？」許宣聽了、滿心歡喜、却想起在李將仕家做生意、居停不穩便、怎生娶親、因此沈吟未答。白娘子見不回答、因又說道「官人有話、不妨直說。何故不回答語？」許宣方說道「蒙娘子高情、感激不尽。只恨此身為人營運、自慚窘迫。仔細尋思、實難從命」。白娘子道「官人若必不願為婚、便難勉強。若為這些、我囊中自有餘財、不消慮得」。便叫道「青兒、你去取些銀子來」。青兒忙走到後房中去、取出一個封兒、遞与白娘子。白娘子接了、復遞与許宣道「這一封、你且權拿去用。若要時、不妨再來取」。許宣双手接了、打開一看、却是五十兩一個元宝、滿面歡喜、便落在袖中、对白娘子說道「打点停當、再來奉復」。遂起身作別。青兒又取出傘來、還了許宣。

次の日になると、店で仕事をしながらも心がうずうずして我慢できず、用事があるということをお口に、またこっそりと白娘子の家へ傘を取りに行った。白娘子は彼が来たのを見るや、また酒を用意して飲ませた。許宣が「ただの傘のために、こんなにご迷惑をおかけするわけには参りません」と言うと、白娘子は「酒を飲むのは情を飲むということであり、傘のためではありません。どうぞお飲みください。まだお話があります」と言う。許宣が何杯か飲んで、「お話というのは何ですか」と問うと、白娘子はまた一杯酒を注ぎ、自ら許宣の前へ持って行き、にこにこ笑いながら言うには、「旦那さま、仙人の前では嘘をつけないと申します。私は夫を亡くしてから一人の身です。きつと旦那さまとは前世からのご縁があったのだと思います。船の中でお会いしたときから、私たちは互いに情を感じたではありませんか。もし私への愛情がございましたら、よい仲人を見つけて、百年の契りを結びましょう」ということである。許宣はそれを聞いて喜びでいっぱいになったが、一方で、李將仕の家で仕事をし、(姉夫婦の家に)寄寓しているため落ち着かないのに、どうしてこのような身で妻を娶ることができようかと思ひ、考え込んでしまつて返事をしない。白娘子は返事がないのを見て、「何かお話があるのですしたら、はっきりおっしゃってください。どうしてお返事をくだらないのですか」と言った。許宣が「あなたにそのように想つていただいて感激に堪えません。ただ恨めしいことに私は人に使われている身で、お金がありません。ですからよく考えてみると、お言葉には従いがたいのです」と答えると、白娘子は「旦那さまがもし結婚なさりますからご心配は無用です」と言い、「青青、少しお金を取つておいで」と呼びかけた。青青はすぐに裏手の部屋へ行き、一封の包みを取り出し、白娘子に手渡した。白娘子は受け取つて許宣に渡し、「どうぞこれを取りあえずお持ちになつてください。もしご入用のときはまた取りにおいでください」と言った。許宣はそれを両手で受け取り、開けてみると五十兩の元宝であった。満面に喜びの色を湛え、袖の中に入れ、白娘子に向かつて「それでは結婚の準備が整いましたらまたお話に

参ります」と言つて辞去した。そして青青が傘を持ってきて、許宣に返した。

許宣一徑到家、先将銀子放好、又将傘還了人、方纔睡了。次日早起、自取了些碎銀子、買了些鷄鵝魚肉之類、並果品回来。又買了一樽好酒、請姐夫与姐姐同喫。李募事聽見舅子買酒請他、倒¹⁰喫了一驚、因問道「今日為何要你壞鈔？」許宣道「有事要求姐夫姐姐作主」。李募事道「既有事、何不說明？」許宣道「且喫了三杯着」。大家依序坐定、喫了數杯、李募事再三又問、許宣方說道「愚舅蒙姐夫、姐姐照管成人、感謝不尽。但今有一頭親事、与愚舅甚是相宜。已有口風、不消十分費力。但我上無父母、要求姐夫姐姐与我玉成其事」。李募事夫妻聽了、只道要他出財礼、便淡淡的答应道「婚姻大事、也須慢慢商量。今日且喫酒」。喫完酒、各自散去、竟不回答。

許宣はまっすぐ家に帰るとまず銀子を片付け、次に傘を人に返し、そしてようやくやく眠った。次の日早く起きていくらかの銀子を取り出し、鶏や鶯鳥、魚や果物を買って帰った。また、よい酒を一樽買い、姉夫婦に勧めた。李募事は義弟が酒をご馳走してくれるというので驚いて、「今日はどうしてそんなに金を遣うのかね」と聞いた。すると許宣が「お二人にお願したいことがあるのです」と言うので、李募事が「何かあったのなら言えはいじやないか」と言うと、許宣は「まず三杯飲んでください」と言った。そこで皆、順に従つて座り、数杯飲んだ。李募事が再三尋ねるので、許宣は「私はお義兄さんとお姉さんのおかげで成長できました、たいへん感謝しております。今、私にぴったりの縁談があります。すでに話はついておりますので、何も面倒なことはありません。ただ、私には両親がいませんので、お二人にはこのことが上手くいくよう、取り計らっていただきたいのです」と言った。李夫妻はそれを聞いて、自分たちに結納の金品を出させようとしているのだと思い、淡々と「結婚は大切なことだ。じっくり相談した方がいいだろう。今日はとりあえず酒を飲もう」と言い、飲み終わると各自ばらばらになって、それきりとなつてしまった。

過了三兩日、許宣等不得、因催姐姐道「前日說的話、姐姐曾与姐夫商量麼？」姐姐道「不曾」。許宣道「為何不商量？」姐姐道「連日姐夫有心焦、我不好問他」。許宣道「我曉得姐姐不上緊的意思了、想是你怕我累姐夫出錢了」。因在袖中取出那大錠銀子來、遞与姐姐道「我自有的財礼、只要姐夫做個主兒」。姐姐看見銀子、笑說道「原来你在叔叔舖裏做生意、也攢得這些私房、可知要娶老婆哩。我且収在此、待你姐夫回時、我替你說就是了」。過一会、李募事回家、妻子即將許宣的銀子遞与丈夫看道「我兄弟要娶親、原来銀子自有、只要你我做個主兒、須替他速速行之」。李募事接了銀子、在手中翻來不覆去、細看那上面鑿的字号、忽大叫道「不好了！我全家的性命都要被這錠銀子害了！」妻子道「活見鬼！不過一錠銀子、有甚利害？」李募事道「你那裏知道、現今邵大尉庫內封記鎖押都不動、竟不見了五十錠大銀、正着落臨安府捉賊、十分緊急。臨安府正沒尋頭路、出榜緝捕、写着字号錠数、捉獲者賞銀五十兩、知情不首及窩藏正賊者、全家發邊遠充軍。這銀子与榜上字号相同、若隱匿不報、日後被人出首¹¹、坐罪不小」。妻子聽了、只嚇得咯抖抖的發戰道「不知他還是借的、還是偷的。却怎生区处？」李募事道「我那管他是借的、是偷的、他自作自受、不要害我一家」。因拿了這錠銀子、竟到臨安府出首。

二三日経つと許宣は待ちきれなくなり、姉を促して「先日の話ですが、義兄さんと相談してくださいましたか？」と聞いた。姉が「まだです」と答えると、「どうして相談してくれないのですか」と許宣は言った。姉が「夫は毎日いろんなことがあっていらいらしているの、私から言い出しにくいのです」と答えると、許宣は「姉さんがさっさとしてくれない理由はわかっていますよ。私が義兄さんにお金を出させようと思つているらう」と言い、袖の中から大きな銀子を

取り出すと、姉に手渡しして「結納のお金ならあります。義兄さんにはただ世話人にさえなってもらえればいいのです」と言った。姉はその銀子を見て笑いながら「お前はおじさんの店で仕事をしながらへそくりを貯めていたから、道理でそれで結婚したくなつたんだね。そのお金はひとまず私が預かつて、お義兄さんが帰ってきたら私から言っておくよ」と言った。少し経って李募事が帰ってくる、妻はすぐに許宣の金を夫に手渡しして、「弟が結婚したいというのはお金を自分で用意していたからで、私たちはただ世話人になればいいのです。早く話を進めてあげましょう」と言った。李募事は銀を受け取り、手の中でひっくり返しながらか細かく上に刻まれている番号を見て、突然「いかん！ この金のせいで俺たちはみんな殺されてしまうぞ！」と叫んだ。妻は「そんなまさか！ たかが銀一錠に何があるっていうの？」と聞いた。李募事は「お前は知らないだろうが、最近邵大尉が庫の中に鍵をかけて封印しておいた五十両の大銀がなくなり、大急ぎで臨安府に命じて盗人を捕えさせようとしているものの、臨安府も手がかりがないので、銀の番号と錠数を記した告示を出して、犯人を捕えた者には銀五十両を与え、事情を知っていて賊を匿った者はその一家を国境に流し、兵役につかせるとしている。この銀子の番号は掲示されているものと同じだ。もしこのまま知らせずにいて、後々誰かが訴え出たら罪は軽くないぞ」と言った。妻は聞いて驚き震えて、「彼が借りてきたのか盗んできたのかは分からないでしょう。いったいどうすればいいの？」と言ったが、李募事は「借りたにしろ盗んだにしろ彼は自業自得だが、俺たち一家を巻き添えにされてはたまらない」と言つて、その銀子を持って臨安府へ訴え出た。

臨安府韓大尹見銀子は真、忙差緝捕捉拿正賊許宣。不多時、拿到許宣当堂、韓大尹喝問道「邵大尉庫中不動封鎖、不見了大銀五十錠、現有李募事出首一錠在此、称是你的。你既有此一錠、那四十九錠却在何处？ 你不动封鎖、能偷庫銀、定是妖人了。可快快招来！」因一面分付阜快備猪狗血、重刑伺候。許宣見為銀子起、忙弃道「小的不是妖人、待小的直說」。便将舟中遇着白娘子、並借傘、討傘、以及留酒、講親、借銀子之事、細細說了一遍。韓大尹道「這白娘子是個甚麼樣人？ 現住何处？」許宣道「他說是白三班白殿直的妹子、現住在薦橋双茶坊巷口、秀王牆對門、黑樓子高坡兒内」。

臨安府の韓大尹は銀子が本物であるのを見て、急いで犯人の許宣を捕えるための役人を差し向けた。すぐに許宣が法廷に連れて来られると、韓大尹は大声で「邵大尉の庫の中に封印しておいたにもかかわらず紛失してしまつた大銀五十錠だが、今、李募事がそのうちの二錠を持って訴え出て、お前のものだと云っている。お前が一錠を持っていた以上（残りもお前が持っているのだから）、残りの四十九錠はどこにあるのか？ 封印してあつた庫の中の銀子を盗み出すことができたからには、お前はさだめし妖術使いなのであろう。早く白状いたせ！」と言つて、役人に言いつけて豚と犬の血を用意させ、重刑を課せうとした。許宣はあの銀子のことを言っているのだということが分かり、慌てて「私は妖術使いではありません。話を聞いてください」と弁解し、船の中で白娘子と出会つたこと、傘の貸し借りをしたこと、酒を飲んだこと、婚約したこと、銀子を借りたことなどを一通り細かく話した。韓大尹が「その白娘子とはいかなる者で、どこに住んでおるのか」と尋ねたので、許宣は「彼女が言うには殿直の白三班的妹だということ、現在は薦橋の双茶坊巷口、秀王のお屋敷の向かいの高みにある、黒塗りの家に住んでおります」と答えた。

韓大尹即差捕人何立、押着許宣、去双茶坊巷口捉拿犯婦白氏来聽審。何立押着許宣、又帶了一千做工的。徑到黑樓子前、一看時、却是久無人住的一間冷屋、随拘地方並左右隣來問、俱回称道「此係毛巡檢家的旧屋。五六年前、一家都瘟疫死尽了。青天白日、常有鬼出来買東西。誰敢還在裏頭住？」且

這地方、並無姓白的娘子」。何立因問許宣道「你莫要認錯了、不是這裏？」許宣此時看見這個光景、也驚得呆了道「分明是這裏。纔隔得三五日、怎便如此荒涼？」何立道「既是這裏、只得打開門進去」。因叫地方動手、將門打開、一齊擁了入去。只見內中冷陰陰、寒森森、並無一個人影。大家一層一層直開了入去、並無一痕踪跡。直開到最後一層大樓上、方遠遠望見一個如花似玉、穿白的婦人、座在一張床上。衆人看見、不知是人是鬼、便都立住脚。獨何立是公差、只得高声叫道「娘子想是白氏了？」府中韓大爺有牌票在此、要請你去與許宣對甚麼銀子的公事哩」。那婦人動也不動、声也不敢。何立沒奈何、只得大着胆子、擁衆上前。將走到面前、只聽得一声響亮、就似晴天打一個霹靂、衆人都驚倒了。響定、再近床边一看、只見明晃晃一堆大銀子、却不見了婦人。及点点銀數、恰正是四十九錠。

韓大尹はすぐに、白婦人を呼び寄せて尋問するために、許宣を押し立てて双茶坊巷口に向かうよう捕縛吏の何立に命じたので、何立は許宣を押し立て、多くの捕吏を伴ってそこに向かった。黒塗りの樓の前に着くと、一目見てここは長い間人の住んでいない家だと感じたため、地保（地方の役人）と近所の者を連れてきて尋ねてみることにした。すると皆、「ここは毛巡檢の旧屋です。五六年前、一家は皆疫病で死んでしまいました。晴れた昼間には、いつも亡霊が買物を出てきます。誰もこんな所に住もうとはしません。また、このあたりに白という姓の女性はいません」と答えた。何立は「間違いいはないのか？　ここではないだろう」と聞いたが、許宣はその光景を見て驚きあきれながら「確かにここです。まだ何日も経っていないのに、どうしてこんなに荒れているのだろう」と言った。何立は「ここだというなら、門を開けて入ってみるしかあるまい」と言つて地保に門を開けさせ、一斉に中に入つていった。中を見ると冷え冷えとしていて、人影ひとつない。皆は一階ずつ確認していったが、何の痕跡もない。最後の一階に入ると、遠くに花や玉のように美しい一人の女が寝台の上に座っているのが見えたが、皆はそれを見て人か幽霊か分からず、立ちすくんでいた。ただ何立だけは公式の役人であるので、大きな声で「白氏でいらつしやいますね。府中の韓大尹の命令書があります。銀子のことについて（許宣の供述を）確かめたく思いますので、許宣と一緒においでいただきたい」と叫ばざるを得なかった。婦人は身じろぎひとつせず、声も出さない。何立はしかたなく、衆を待んで前に進み出た。そして婦人の前に立とうかというとき、晴天の霹靂のような音がひとつ響いたので、皆はひどく驚いた。音が静まって寝台の方を見ると、ただきらきらと光る一山の銀子があるだけで婦人は見えなくなっていた。銀子を数えてみると、ちょうど四十九錠あつた。

何立遂叫衆人將銀子扛到臨安府堂上、一一交明。又將所見之事、細細稟上。韓大尹聽了道「這看起來、自是妖人作祟、與衆人無干。地方隣里、盡無罪寧家。許宣不合私相授受、發配牢城宮。銀子如數交還邵大尉。請邵大尉給賞五十兩與李募事」。一件方纔完了。惟李募事因出首許宣、得了賞銀五十兩、又見許宣因我出首、發配牢城、心下甚是不安、即將給賞銀子尽付許宣作盤費。又叫李將仕與了他兩封書、一封與押司范院長、一封與吉利橋下開客店的王主人。

何立は皆に銀子を臨安府まで運ばせてすべてを納め、見たことを細かく報告した。韓大尹はそれを聞いて「どうやらこれは妖人の仕業で、他の者には関係ないようだ。地保と近所の者たちは無罪だから帰してやれ。許宣はこっそりと金銭の授受をすべきではなかったから、牢城宮に流そう。銀子はそのまま邵大尉にお返しする。邵大尉には懸賞の五十兩を李募事に与えるよう頼んでおこう」と言った。これで一件落着である。ただ、許宣を訴えて五十兩を手に入れた李募事は、自分が訴えたために許宣が牢城に流されると知ってはなはだ心苦しく思い、懸賞の銀子をすべて旅費として許宣に渡し、また、李將仕に頼んで二通の手紙を書いてもらった。一通は押司の范院長、もう一通は

吉利橋のたもとで旅館を営んでいる王主人宛であった。

許宣痛哭了一场、辞別姐夫・姐姐、便同解人搭船到蘇州牢城营来。一到了、就将二書投見范院長並王主人。虧二人出力、与他上下使了錢、討了回文与解人而去。許宣毫不喫苦、就在王主人楼上歇宿、終日独坐無聊、甚是悶人。正是

独上高楼望故郷 愁看斜日照紗窓

自憐本是真誠士 誰料相逢狐媚娘

白白不知婦甚処 青青豈識在何方

隻身孤影流吳地 回首家園寸斷腸

許宣はひとしきり痛哭すると姉夫婦に別れを告げ、護送の役人とともに船に乗り、蘇州の牢城营に向かい、到着するとすぐ、二通の手紙を范院長と王主人に送った。二人は尽力して、役所の上下に金を使って返書をもらい受け、それを役人に渡して彼らを帰した。許宣は少しも苦しい思いをすることなく、王主人の旅館の二階で、一日中ひとりで退屈に過ごしていた。まさに

一人高楼に上つて故郷を望み 夕陽の照らす紗窓を愁い見る

自分は誠実な男と思っていたが まさか妖女にめぐり逢うとは

白娘子はどこに帰っていったのか 青青はどこにいるのだろうか

单身この地に流れ来て 故郷の方を眺めれば私の心は千々に乱れる

許宣在蘇半載、甚是寂寞。忽一日、王主人進來、对他說道「外面有一乗轎子、坐着一位小娘子、又帶着一個丫鬢尋你」。許宣聽了喫驚、暗想道「誰來尋我？」慌忙走到門前來看、不期恰正是白娘子与青青。一時見了、不勝気苦、因跌着脚、連声叫道「死冤家、自被你盜了官銀、害我有屈無伸、当官喫了多少苦楚！今已到此田地、你又趕來做甚？」白娘子道「小乙官人、不要錯怪了我。我今特來要与你分弁」。王主人見二人只管立在門前說長道短、恐人看見不雅、因說道「既是遠來、有話請裏面去說」。白娘子乗機便要入去、許宣忙橫身攔住道「他是妖怪、不要放他進去！」王主人因將白娘子仔細看了兩眼、帶笑說道「世上那有這等一個妖怪？不可出口詆人、請進去不妨」。

許宣は蘇州で半年を過ごし、たいへん寂しい思いをしていた。ある日、王主人が入ってきて彼に「外に駕籠が来て、女性が一人乗っている。女の子を一人連れていて、お前を探しているよ」と言った。許宣はそれを聞いて驚き、「誰が尋ねてきたのだろうか」と思った。急いで玄関まで行つてみると、思いがけないことにそれは白娘子と青青であった。見た途端、腹が立って我慢できなくなり、地団太を踏みながら続けざまに「こいつめ！お前が役所の金を盗んでから俺は濡れ衣を着せられて、役所でひどい目に遭わされたんだ！今日またこんなところまで何をしに来たんだ！」と叫んだ。白娘子は「旦那さま、私を責めないでください。私は今日、わざわざ弁解のために参つたのです」と言った。王主人は二人がいつまでも門の前であれこれ話しているのを見て、人がそれをみつともないことだと思ふのを心配して、「遠くからいらつしやつたのですからどうぞ中でお話ください」と言った。白娘子がその機に乗じて入ろうとすると、許宣は慌てて立ちはだかつて「彼女は妖怪です。入れてはいけません」と言った。王主人は白娘子をじっくり見て、「この世のどこにこんな妖怪がいるかね。そんなに人を罵つてはいけないよ。どうぞ構わずお入りください」と言った。

白娘子進到裏面、先与主人媽媽見過、然後対許宣說道「奴家既以身子許了官人、就是我的夫主了。終不成反來遺害官人麼？就是付銀子与官人、也是為好、誰知有禍？若說銀子來歷不明、罪皆座于

先夫。奴家一婦人、如何得知？ 恐官人錯埋怨、故特来与官人弁明白了。我去也甘心」。許宣道「這都罷了、只是差人来捉時、明明見你坐在床上、為何響了一声就不見了？ 豈不是個妖怪？」白娘子笑道「那一声響、是青青用毛竹片刷板壁、弄怪嚇衆人。衆人認做怪、大家呆了半響、故奴家往床後遁去。衆人既害怕、不敢搜求、見了銀子、又以銀子為重去了。故奴家得脫身、躲在華藏寺前姨娘家裏。復打聽得你發配在此、故帶了些盤纏来看你、並討你婚姻的信息。不期你疑我是妖怪、我只得去了」。遂立起身来要走。

白娘子は中に入ると、まずおかみさんに挨拶し、次に許宣に向かって「私はすでにこの身を旦那さまに許しました。つまり旦那さまはもう私の夫です。それなのに、どうして私が旦那さまを陥れるようなことがありますか。お金をお渡ししたのはよかれと思つてのこと。災いをもたらすものであるなどとは思つてもみませんでした。あの銀子のいわれがはつきりしないことについては、その罪はすべて私の前の夫にあります。私のようなただの女にどうしてそのようなことがわかりましようか。おそらく旦那さまが誤解して私を恨んでいると思つたので、私は申し開きをするためにここまで来たのです。納得さえしていただければ、私は帰つても満足です」と言つた。許宣は「そのことはもうたくさんだ。ただ、役人が捕えに来たとき、お前は確かに寝台の上にいたのに、どうして音が鳴り響くともに見えなくなつたのだ。これでも妖怪ではないと言ふのか」と言つた。白娘子は笑つて「あの音は青青が孟宗竹で壁を叩いて、皆を驚かせたのです。あの人たちは妖怪の仕業だと思つてしばらくぼんやりしてしまいましたので、私は寝台の後ろに隠れました。皆はすっかり恐れてしまつたのでそれ以上私を探そうとはせず、銀子を見つけると、私よりもそちらの方を重視して行つてしまいました。そこで私は抜け出して、華藏寺前の伯母の家に身を隠したので。あなたがここに流されたと聞き、わずかな旅費を持つてやつて来て、また夫婦になろうと思つていたのですが、まさか妖怪に疑われるとは思つてもみませんでした。私はもう帰るしかありません」と言つて立ち去ろうとした。

主人媽媽忙留下道「既偕遠来了、就要去、也在舍下權住幾日」。白娘子尚未肯、只見青青道「既是主人家好意再三勸留、娘子且住兩日再商量。況当日原許過嫁小乙官人的、今日也難硬絕」。白娘子接口道「羞殺人！ 終不成奴家没人要、定捱在此！」主人媽媽道「既然当初已曾許下、誰敢翻悔？」須選個好日子、就在此成就了百年姻眷為妙」。

宿のおかみは引きとめて、「遠くからいらつしやつたのですから、お帰りになるにしても、数日ご逗留なさつてください」と言つた。白娘子は頷かなかつたが、青青が「ご主人たちがご好意でこれほど勧めてくださいるので、お嬢さまはひとまず二日ほどお泊りになつて、また話し合はれてはいかがですか。もともと旦那さまのところにお嫁に行かれるつもりでしたのに、今日のお誘いをお断りするのはいかがなものでしょうか」と言ふのを聞くと、「ああ恥ずかしい！ どうせ私は誰からも捨てられたんじゃないの。それなのにここにいれば、きつとつらい目に遭うに違いないわ！」と言つた。おかみさんは「もともと結婚の契りを交わしたのであれば、誰がその話を反故にするのですか。よい日を選んで、ここで百年の契りを結ぶのがよいでしょう」と言つた。

許宣初已認真是妖是怪、今被他花言巧語、弄得乾乾淨淨、竟全然不疑了。又見他標標致致、殊覺動心、借主人媽媽之勸、便早欣欣然樂從了做親之議。白娘子囊中充足、彼此喜歡。到了做親之後、白娘子做放出迷人的手段、弄得個許宣昏昏迷迷、如遇神仙、恨相見之晚。

許宣ははじめこそ妖怪だと思つていたが、今は彼女の巧みな言葉による明快な弁解を聞いて、ま

まったく疑わなくなってしまった。そして彼女が非常に美しいのを見て心が動き、さらに王主人のおかみさんの勧めもあったので、すっかり喜んで結婚することとなった。白娘子の財産は十分であったので互いに喜んだ。さらに、結婚した後、白娘子はその色香によって許宣をまるで神仙にでも出逢ったかのようにとろけさせてしまったので、許宣はこうなるのが遅かったことを恨んだ。

時光易過、倏忽半載。一日、是二月半、許宣同着幾個朋友到臥佛寺前見臥佛。忽走到寺門前、見一道人在那裏売菓並施符水。許宣無心、偶上前去看看。那道人一見了、便喫驚道「官人頭上一道黑氣、定有妖怪纏身。其害非淺、須要留心」。許宣原有疑病、一聞道人之言、便不禁伏地拜求救度。那道人與他靈符二道、分付他三更燒一道、自家頭髮裏藏一道。許宣到家、忙將一道悄悄的藏在頭髮之內、這一道要等到三更燒化。

時は過ぎやすく、たちまち半年が経った。二月半ばのある日、許宣が友人たちと臥佛寺へ臥佛を見に行くと、寺門の前で一人の道士が菓を売ったり符水を配ったりしていた。許宣が何の気なしに近寄って見にいくと、道士は彼を一目見て驚き、「あなたの頭上には妖気が立ち込めている。きつと妖怪が纏わりついているのだろう。その害は軽くありませんぞ。用心なされ」と言った。許宣はもともと疑いやすい性格だったので、道士の言葉を聞くやいなや、思わず土下座して救いを求めた。道士は二枚の靈符を与え、三更の時刻に一枚を焼き、もう一枚を自分の髪の中に入れておくよう言いつけた。許宣は家に帰ると急いで一枚をこっそり自分の髪の中に入れ、もう一枚は三更を待つて焼くことにした。

暗候時、白娘子忽嘆口氣道「我和你許久夫妻、尚沒一些恩愛、反信別人言語、半夜三更、要燒符來騙我、你且把符來燒燒看！」許宣被他說破、便不好燒。白娘子軫奪過符來、燈上燒了、全沒一些動靜。白娘子笑道「如何？我若是妖、必然做出来了」。許宣道「這不干我事。是臥佛寺前一個雲遊道人說你是妖怪」。白娘子道「他既說我是妖怪、我明日同你去、且叫他變一個怪形与你看看」。

暗くなつた頃、白娘子は嘆くような口ぶりで「私たちは夫婦になつて久しいのに、少しも愛情を注いでくださらず、それどころか他人の言葉を信じ、三更に護符を焼いて私を避けようとなさるのですね。さあ、焼いてみてください！」と言った。許宣は彼女に見破られて焼きづらくなつたが、白娘子が護符を奪い取つて燈火で焼いたところ、何事も起こらなかつた。白娘子が笑つて「いかですか？もし私が妖怪なら必ず姿を現すはずでしょう」と言うと、許宣が「私は関係ないよ。臥佛寺の前にいた旅の道士がお前を妖怪だと言つたんだ」と答えたので、白娘子は「その人が私を妖怪だと言つたのなら、明日一緒に行って、彼が私を妖怪の姿に変えるのをあなたに見てもらいましよう」と言った。

次日、分付青青照管下处、夫妻二人來到寺前、只見一簇人围着、那道人正在那裏散符水哩。白娘子輕輕走到面前、大喝一声道「你一个不学無術的方上小人、曉得些甚麼？怎敢在此胡言乱語、鬼画妖符、妄言惑衆！」那道人猛然聽了、喫了一驚、忙将那女娘一看、見他面上氣色古怪、知他来歷不正、因回言道「我行的乃五雷天心正法、任是毒妖惡怪、若喫了我的符水、便登時現出形来、何況你一妖女。你敢喫我的符水麼？」白娘子聽了、笑道「衆人在此做個証見。你且書符来、我喫与你看」。道人忙忙書符一道、遞与白娘子。白娘子不慌不忙、接將過來、搓成一团、放在口中、用水吞了下去、笑嘻嘻立了半晌、並無動靜。看的人便七嘴八舌、罵將起來道「好胡說！這等一個女娘子、怎說他是妖怪？」道人被罵、目瞪口呆、話也說不出一句。白娘子道「他方上野道、毀謗闍賢、本該罰他墮落、今看列位

分上、只吊他一索罷了」。一面說、一面口中不知念些甚麼、只見那道人就像有人網縛的一般、漸漸的縮成一團、又漸漸的高高吊起、口中哼個不了。衆人看見、尽驚以為奇、連許宣也驚得呆了。白娘子道「若不看地方干係、把這妖道吊他一年纔好！」因輕輕噴口氣、那道人早立時放下地來。那道人得能落地、便只恨爹娘少生兩隻脚、飛也似的去了。衆人一闌而散、夫妻依旧回家。正是

邪邪正正術無辺 紅日高頭又有天

寧在人前全不会 莫在人前会不全

次の日、青青に留守を言いつけ、夫婦二人で寺の前に来ると、人々が取り囲む中、あの道士が符水を配っているのが見えた。白娘子はそつとその前に行くと、大声で「あんたみたいな何の能力もない旅の道士に何が分かるっていうの？ どうしてここでたらめを言うような手口で人々をたぶらかそうとするの！」と言った。道士は突然そのように言われて驚き、慌ててその女を見てみると、彼女の気色が尋常ではないので、彼女が真つ当な人間ではないことを悟り、「私が修めたのは五雷天心の正法だ。どんな妖怪であっても私の符水を飲めばたちまち姿を現す。お前のような妖女ならなおさらだ。お前に私の符水を飲む勇氣があるか？」と言いつ返した。白娘子はそれを聞いて笑いながら、「皆さんがここで証人として見ていらつしゃいます。符を書いてごらんさい。飲んでみせてあげましょう」と言った。道士はすぐに符を書き、白娘子に手渡した。白娘子はおもむろにそれを受け取り、小さく丸めてから口の中に入れ、水で飲み込んだ。にこにこしながらしばらく立っていたが、何の変化もない。見ている人々は口々に「でたらめだ！ このご婦人をどうして妖怪だなどと言うのだ！」と罵り始めた。道士は罵られてあつけにとられ、一言も発することができなかつた。白娘子は「このろくでなしの道士は私の名誉を傷つけました。本来ならあの人を徹底的に懲らしめてやるところですが、今日は皆さんに免じて、彼を吊り上げるだけにしておきましょう」と言つて、何やら口の中で唱えると、道士はまるで誰かに縛りあげられているかのように、丸く縮まつてだんだん高く吊り上げられ、うめき声を挙げ続けた。大衆はそれを見て驚き、許宣もあつけにとられてしまった。白娘子は「ここのお役人の迷惑になるのでなければ、この怪しい道士を一年くらい吊り上げておくのだけれど」と言つて、すぐに道士を地面に降ろした。道士は地面に降りると、両親が二本足にしか生んでくれなかつたことを恨み、飛ぶようにして去っていった。見物人はがやがや言いながら帰っていき、夫婦はもとのように家に帰つた。まさに

邪も正も方術は広大無辺 太陽の上には天がある

少しばかりできるより 何もできない方がまし

過了些時、又是四月初八日仏生日、許宣一時高興、要到承天寺去看佛会。白娘子道「甚麼好看？」既要去、因取出兩件新鮮衣服替他換了、又取出一把金扇、上繫着一個珊瑚墜兒、与他扇。又分付他「早早回来、忽使奴記掛」。許宣答應了、便穿着一身華服、摇摇擺擺、到承天寺来閑戲。耳朵裏雖聽得乱哄哄伝説、周将仕家典庫内不見了許多金珠衣物、現今番捕拿人、許宣却全不在意、自同着燒香的男女遊玩。不期番捕有心、看見許宣身上穿的、手裏拿的、与失单上相同、便攢近許宣面前道「官人扇子可借我一看」。許宣不知是計、遂将扇子遞与公人。衆公人看了是真、便吆喝道「賊贓有了、快快拿下！」衆人齊上、遂把許宣一索子綁了。好似

数隻皂雕追紫燕 一群飢虎啖羊羔

しばらくして、四月八日の釈迦生誕の日、許宣はふと承天寺の灌仏会に行きたくなつた。白娘子は「何がおもしろいのですか」と言いながらも、許宣が行きたいと言うので新しい衣服を二着取り出して着替えさせ、また金の扇子を取り出して珊瑚の下げ飾りをつけ、彼に渡した。そして「早く

帰ってきて、私に心配させないでくださいね」と言った。許宣は返事をして華やかな衣服を身にまとい、鷹揚として承天寺にやってきてぶらぶらしていた。そこへ、周将仕の家の蔵からたくさんの財宝や衣類がなくなつて、今、捕吏が犯人を捕えようとしているところだという噂ががやがやと耳に入ってきたが、許宣はまったく気に留めず、焼香している人の流れにしたがつて寺の中を回つていた。するととはからずも捕吏が、許宣の身につけているものや手に持っているものが盗品一覧表にあるのと同じであることに気づき、許宣の前へ走って行き、「失礼ですがお持ちになつている扇子を見せていただけませんか」と言った。許宣はそれが計略とは知らなかつたため、扇子を彼に手渡した。役人が、本物であることを確認して「盗品が見つかつたぞ、早く捕まえろ！」と叫ぶと、大勢が一斉に飛びかかり、ついに許宣を縛り上げた。まるで

数羽の鷹がつばめを追い 一群れの虎が羊を食う

許宣被捉再三分辯、衆人那裏聽他？ 適值府尹坐堂、衆人竟押上堂来。府尹因問道「穿的衣服、扇子、既已現現被捉、其余金珠賍物現在何処？ 從実供来、免受拷打」。許宣稟道「小的穿的衣服物件、皆是妻子白娘子贈嫁的、怎說賊贓？ 望相公明鏡詳察」。太尹道「好胡說！ 獲物現与单对、怎敢以妻子推託？ 且你妻子今在那裏？」許宣道「現在吉利橋王主人楼上」。太尹即差緝捕、押了許宣、速拿白娘子来審。衆人一闕到了店中、王主人見了、驚問道「做甚麼？」許宣道「白娘子害我、特来拿他」。王主人道「白娘子如今不在楼上。因你承天寺不回、他同青青来寺前尋你、至今未回」。緝捕見說白娘子不在家、便鎖了王主人来回太尹。太尹道「婦人家尋丈夫、諒去不遠。着王主人尋拿、許宣寄監、候拿到白氏、審明定罪」。

許宣は捕えられて再三弁明したが、役人たちはまったく聞き入れない。府尹が裁きの場に着席すると、役人たちは許宣をその場に護送した。府尹が「着ていた衣服や扇子はすでに押収したが、残りの盗品はどこにある？ ありのまま白状すれば拷問は許してやる」と問うと、許宣は「私の着ていたものはすべて妻の白娘子が渡してくれたものです。なぜ盗品だなどとおっしゃるのですか？ どうかご賢察ください」と言った。府尹が「でたらめを言うな！ 押収品はこの盗品一覧表と同じものなのだ。なぜ妻のせいにする？ お前の妻は今どこにいるのだ？」と問うと許宣が「今は吉利橋の王主人の家にいます」と答えたので、府尹はすぐに捕吏を差し向け、許宣を先に立てて速やかに白娘子を捕え、取り調べようとした。役人たちが店に着くと王主人はそれを見て驚き、「どうしたのですか？」と尋ねた。許宣が「白娘子が私を陥れたのです。彼女を捕まえに来ました」と言うと、王主人は「白娘子は今いませんよ。あなたが承天寺から帰つてこないで、青青と一緒に寺まで探しに行つたきり帰つてこないのです」と言った。捕吏は白娘子が家にいないと聞くと、王主人を連行して府尹のところへ戻つた。府尹は「婦人は夫を探しに行つたわけだから、そんなに遠くまで行つていないだろう。王主人についていつて捕えてこい。許宣は監禁しておけ。白氏がやつてきたら罪の所在を明らかにしよう」と言った。

此時周将仕見拿着了許宣、正立在府門前催審、忽家人来報道「金珠等物都在庫閣頭空箱子内尋着了」。周将仕慌忙回家看時、果然全有、只不見扇子・扇墜。将仕道「扇子或有相同、明是屈了許宣」。便又到府中暗暗与該房說知、有了情由、叫他鬆放許宣。故不復問罪、只說地方不相宜、改配鎮江。将行、恰好杭州邵太尉又使李募事到蘇州幹事。李募事記掛着許宣、忙到王主人家来看他、聞知改配、李募事因說道「鎮江的李克用、是我結拜的叔叔、住在針子橋下、開生藥鋪。我写書与你、投他自有好處」。

周将仕は許宣が捕えられたと知り、府門の前に立つて裁判の開始を促していたが、そこへ家の者

がやってきて「財宝などはみな蔵の棚の空箱の中になりました」と報告した。周将仕が慌てて家に帰って見てみると盗品はすべてそこにあり、ただ扇子と下げ飾りだけがなかった。将仕は「扇子はもしかしたら他に同じものがあるのかもしれない。明らかに許宣は無実だ」と思い、すぐにまた府中へ行き、こつそりと役人に事情を説明し、許宣を釈放してもらった。そして二度と許宣を罪に問わなかったのだが、ただこの土地にいさせるのはあまりよくないということで、鎮江に流すことにした。そこへちようど杭州の邵太尉が、蘇州へ李募事を派遣した。李募事は許宣のことを心配しており、急いで王主人の家へ行ったところ、配流のことを知った。李募事は「鎮江の李克用は私の義理の叔父で、針子橋のたもとで薬屋を開いている。手紙を書いてやるから、彼に渡せばよくしてくれるだろう」と言った。

許宣得書、同差人无数日到了鎮江。尋到李克用家、見了李克用、将書投上、說道「小人是杭州李募事¹³的舅子。家姐夫有書在此、求老将仕青目」。李克用看了書、便請兩個公差同他入去喫飯、一面即差当直的同到府中下了公文、使用些錢鈔、保領回家。公差討了回文自去。

許宣は手紙を受け取り、護送役人と一緒に数日も経たぬうちに鎮江に着いた。李克用の家を尋ねて面会すると、手紙を渡して「私は杭州の李募事の義弟です。義兄からの手紙をお持ちしました。お目をかけてくださいますようお願いいたします」と言った。李克用は手紙を見て、役人と許宣を家に入れて食事をさせ、一方で使用人を許宣たちと一緒に役所へ行かせて公文書を出し、金を使って保釈させた。役人たちは返書を受け取って帰っていった。

許宣到家、拜謝了克用。克用見書上說許宣原是生藥店中主管、便留他在店中做買賣。看了幾日、見他十分精細、甚是喜歡。許宣恐衆人妬忌、因邀他們到酒肆中一叙、通通河港¹⁴。衆人喫完散去。許宣還了酒錢出門、覺道有些醉意、恐怕冲撞了人、只低着头往屋簷下走。不期一家楼上推開窓、播下熨¹⁵斗灰來、飛了一頭。許宣便立住脚、罵道「誰家不賢之婦！難道眼睛瞎了？」只見那婦人走下樓來道「官人休罵、是奴家一時失誤」。許宣抬頭看時、不是別人、恰正是白娘子、不覺怒從心上起、因罵道「你這賊妖婦、連累得我好苦！喫了兩場大官司！蘇州影也不見、却躲在這裏！」遂走上前、一把捉住¹⁶。「今日決不私休了！」白娘子忙陪笑臉道「一夜夫妻百夜恩、你不消着急、且聽我說明了。若有差錯、再惱也不遲。前日那些衣服・扇子、都是我先夫留下的、又不是賊贓。因你恩愛情深、故叫你穿在身上、誰知被人誤認。此皆是你年災月晦¹⁷、与我何干？」許宣道「那日我回來尋你、如何不見、反在此間？」白娘子道「我到寺前尋你、聞知你被捉、決要連累我出醜、只得叫青青討隻船、到此母舅家暫住、好打聽消息。我既嫁了你、生是許家人、死是許家鬼、決不走開。今幸相逢、任你怎麼難為我、我也不放你了」。許宣被他一頓甜言說得滿肚皮的氣都消了、因說道「你在此住、難道是尋我？」白娘子道「不是尋你、却尋那個？還不快上樓去」。許宣轉過念來、竟酥酥的跟他上樓去住了。正是

許多惱怒欲持刀 幾句甜言早尽消
豈是公心明白了 蓋因私愛乱心苗

許宣は家に着くと克用に礼を言った。克用は手紙に許宣がもともと薬屋の番頭であったと書いてあるのを見て、自分の店で仕事をさせることにし、何日か様子を見たところ、仕事ぶりがたいへん丁寧だったので非常に気に入った。許宣は他の人たちに妬まれるのを心配して、酒屋に皆を招待して親睦を深めようとした。皆が飲み食いを終えて帰り、許宣が代金を支払って店を出たところ、少し酔いを覚えたので、人にぶつかってはいけないと思い、頭を低くして家の軒下を通って行った。すると不意にある家の楼上で窓が開き、火熨斗の灰が頭に降ってきた。許宣は立ちすくみ「どこの

家の馬鹿女だ！ 目が見えないのか！」と怒鳴った。すると婦人が下まで降りてきて、「どうぞお怒りにならないください。私の粗相でございました」と言ったので許宣が顔を上げて見ると、それは他でもない白娘子であつた。思わず怒りがこみ上げてきて、「この妖婦め！ 俺を巻き添えにしてさんざん苦しめやがつて！ 二度も裁判にかけられたんだぞ！ 蘇州で影も形も見えなくなつたと思つたらこんなところにいるとは！」と怒鳴り、白娘子をしっかりとつかまえて「今日はお出るところへ出るぞ！」と言つた。白娘子は笑いながら「一夜の営みをした夫婦には百夜の恩があると申します。そんなに焦らずに、まずは私の話を聞いてください。もし何か間違いがあつたなら、それから怒つても遅くないでしょう。あの日の服や扇子はすべて前の夫が残しておいたもので、盗品ではありません。あなたの愛情がとて深かつたので、身につけていただいたのです。誰が人に盗品と間違われるなどと思うのですか。これらは皆あなたがたまたま災難に見舞われたというだけで、私には何の関係もありませんわ」と言つた。許宣は「あの日は家に戻つてからお前を探し回つた。どうしてあのかきは見つからず、今こんなところにいるんだ」と尋ねた。白娘子は「あなたを探して寺の前まで行つたとき、あなたが捕えられたと聞き、必ず私にも累が及んで恥をさらすことになると思つたので、青青に船を用意させ、この叔父のもとにしばらく身を寄せてあなたの消息を尋ねるしかなかつたのです。私はもうあなたに嫁いでいますから、生きては婚家の者として、死しては婚家の鬼として、決してあなたのもとを去ることはありません。今、幸いにもこうして巡りあえたのですから、たとえあなたがどれだけ私を苦しめても、私はもうあなたのもとを離れません」と言つた。許宣は彼女の甘い言葉によつて腹いっぱい怒りも消え失せ、「まさかお前はここで私を探していたのか？」と聞いた。白娘子は「あなた以外に誰を探すというのですか。早く上に行きましようよ」と言つた。許宣は思い直して、結局ふらふらと彼女と一緒に上へ上がり、そこに泊まることになつた。まさに

殺したいほど憎んでいたが 甘い言葉でその気は失せた

本当のことは分かっているが 愛ゆえに心乱される

許宣と白娘子住了一夜、相好如初、依旧同搬到下処過日子。一日、是李克用的寿誕、夫妻二人、買了燭・麵・手帕等物、同到李家來拜壽。李克用安排筵席、留親友喫酒。原來李克用是個色中餓鬼、一見了白娘子生得如花似玉、却便或東或西、躲着偷看。忽一會兒、白娘子要登東、便叫養娘指引他到後面僻靜處。李克用却暗暗閃在一邊、讓白娘子到後面去了、他却輕腳輕手悄悄跟到東廁的門縫裏張看。不張看猶可、一張看、內裏那有個如花似玉的佳人？ 但看見一條吊桶籠的大白蛇、盤在東廁之上、兩眼就似燈盞、放出金光來。李克用突然看見、驚個半死、忙往外跑、剛跑轉彎、¹⁸腿脚戰、早一交跌倒、面青唇紫、人事不知。養娘看見、慌忙報知老安人並主管、用安魂定魄丹服了、方纔醒轉。老安人忙問「這是為何？」李克用不好明言、只說「連日辛苦、一時頭風病發。不妨不妨、你們自去飲酒」。

許宣は白娘子と一夜を過ごし、その仲睦まじいことといったらはじめの頃のように、また元のようと同じ宿に引越して日を過ごした。ある日、李克用の誕生日のお祝いがあるというので、夫婦二人は蠟燭・麵・手拭などを買つて李家に行き、祝辞を述べた。李克用は宴席を設け、親類や友人と飲み食いしたが、彼はもともと色魔であつたので、白娘子の花や玉のような美しさを見ると、うろろうしながら何とか覗き見しようとした。少し経つと白娘子が廁へ行こうとしたので、下女に指示して彼女を後ろ側の廁に案内させた。そして李克用はこっそり隠れて、白娘子を後ろの方へ行かせ、自らは音を立てないように忍び足で、声を潜めて廁の戸の隙間から覗いた。覗かなければよかつたのだが、覗いてみると中にいるのは花や玉のような美人ではなく、釣瓶ほどの大きさもある白

蛇が廁の上でとぐるを巻いて、燈盞のような両眼から金色の光を放っている姿であった。李克用はいきなりそのようなものを見たので死ぬほど驚き、急いで外に逃げ出したが、角を曲がると足が震えてひっくり返り、顔面蒼白で唇は紫色になり、人事不省に陥った。下女がそれを見て、慌てて夫人や手代に知らせ、安魂定魄丹を飲ませると、やっと正気に戻った。夫人に「いったいどうなされたのですか？」と尋ねられても正直に言えることではないので、李克用は「連日の疲れが出てちよつと頭が痛くなってしまった。かまわないから皆は酒を飲んでくれ」とだけ答えた。

衆人飲散、白娘子回家、恐怕李克用到鋪中対許宣說出本相来、便心生一計、只是嘆氣。許宣道「今日出去喫酒、是快活事、因何嘆氣？」白娘子道「説不得。你道李克用這老兒是好人麼？竟是假老实。见我起身登東、他遂躲在裏面、欲要姦騙我、扯裙扯褲来調戲、我叫起来、又見衆人都在那裏、怕裝幌子、只得推倒他、方得脱身。這惶恐、却從那裏出氣？」許宣道「既不曾玷汚你、他是我主人家、出于無奈、只得忍了。以後再休去了」。娘子道「既如此、我還有二三十兩銀子在此、何不辞了他、自到馬頭上開個小藥鋪？」豈不強如去做主管？」許宣道「好」。忙与李克用説了。李克用自知惶恐、也不苦留。

皆が飲み終わって帰ってしまうと白娘子も家に帰り、李克用が店で許宣に自分の正体のことを話すのを恐れて、一計を案じ、ため息をついてみせた。許宣は「今日は宴会で楽しかったのに、なぜため息などつくんだね」と聞いた。白娘子は「申し上げにくいことですが、あなたは李克用をよい人だと思っていられっしゃるのですか？ あれは誠実を装っているだけです。彼は私が廁へ行くのを見るときに隠れて、私を犯そうと裙や袴を引つ張って戯れてきたのです。私は叫ぼうとしましたが、人がたくさんいたので恥ずかしくてそれもできず、彼を押し倒してようやく逃げ出すことができたのです。この悔しさをどこへぶつければよいのでしょうか！」と言った。許宣が「まあ、汚されたわけではないし、彼は私の主人なのだから我慢するしかない。今後、お前はもう行かないようにしなさい」と答えると、白娘子は「このようなことが起こり、私にはまだ二三十両のお金があるというのに、どうして彼のところをやめて自分で渡し場に薬屋を開こうとしないのですか。番頭であることにこだわる必要などないでしょう」と言った。許宣はそれに同意し、すぐ李克用に話した。李克用も後ろめたいことがあったので引き留めはしなかった。

許宣自開店後、生意日盛一日。忽一日、是七月初七、乃英烈龍王生日、許宣要去焼香。白娘子先再三勸他不要去、見他定要去、因説道「你既要去、只可在山前山後大殿上走走、切不可到方丈裏去与禿子講話、恐他又纏你布施」。許宣道「這個使得、依你便了」。遂在江邊搭了船、徑投金山寺来。先到龍王堂焼了香、然後各処閑走走看看、無心中忽走到方丈裏去、看見許多和尚圍着、像説法一般、方想起妻子叮囑之言、急急退出、却不防座上大和尚早看見了道「此人滿臉妖氣」。因分付侍者、叫他來說話。及侍者下来叫時、許宣已出方丈去了。大和尚見叫他不着、便自提了禅杖、趕將出来、趕到寺前、見衆人皆欲渡江、因風大尚立在門外等待。忽見江心裏、一隻小船飛也似来得快。衆人都驚道「這些些小船怎麼不怕風、又来得快？」

許宣が店を開いてから、商売は日々繁盛していった。七月七日、この日は英烈龍王の生誕の日であるので、許宣は焼香に行きたくなった。白娘子は再三行かないように勧めたが、彼がどうしても行くというのを見て、「お出かけになるのでしたら、ただ山の前後の本堂にだけお参りして、決して方丈の中に入ってお坊さまと話したりはしないでください。きつとまたお布施を要求してきますから」と言った。許宣は「わかった、言うとおりにするよ」と言って、川辺で船に乗り、まっすぐ

金山寺へ行った。まず龍王堂で焼香をして、その後いろいろ見て回っていたが、いつの間にか方丈の中へ来てしまった。多くの和尚が説法をしているのを見て、妻に言われたことを思い出し、急いで外に出ようとしたとき、不意に座の上にはいた大和尚が彼を見て「この人は頭に妖気がみなぎっている」と言い、侍者に命じて彼を連れてこさせ、話をしようとした。しかし侍者が彼を呼びに行つたとき、許宣はすでに方丈を出てしまっていた。大和尚は彼を呼び止められなかつたのを見て、自ら禅杖を手にして、彼を追つて寺の前まで行つた。そこでは多くの人が川を渡ろうとしていたが、風が強くて、門の外にたたずんでいた。そこへ川の真ん中に、一隻の小船が飛ぶような速さでやってくるのが見えた。皆は「あのような小船がなぜこの風を物ともせずにあんなに速くやつて来るのだろうか」と驚いた。

此時許宣也立在衆人中伸頭争看、不期那来的小船恰正是白娘子与青青立在上面。許宣正喫驚要問他来做什么、只見白娘子早遠遠叫道「丈夫、風大、我特来接你、可速速上船来！」許宣見了、一時没主意。正要下船、不料大和尚在後看得分明、大喝一声道「孽畜！你到此做什么？」正要举禅杖打去、只見白娘子与青青連船都翻下水底去了。許宣看見、嚇得魂不附体、忙問人道「這禅師是誰？」有認的道「這是法海禅師、要算当今的活佛」。正說不了、那禅師早着侍者喚許宣去問道「你從何處遇此孽畜？」許宣見問、遂將前項事情從頭說了一遍。禅師道「雖是宿緣也因汝欲念太深、故兩次三番迷而不悟。今喜汝災難已過、可速回杭、修身立命。如再來纏你、可到湖南淨慈寺裏來尋我。有詩四句、你可牢記者、

本是妖蛇變婦人 西湖岸上壳嬌声
汝因欲重遭他計 有難湖南見老僧」

このとき許宣も人々の中に立ち、首を伸ばして見ていた。すると意外にも、小船に立っているのは白娘子と青青であった。許宣は驚き、何をしに来たのか聞こうと思つていたところ、その前に白娘子が遠くから「あなた、風がひどくなりましたのでお迎えに参りました。早く船にお乗りください！」と叫ぶのを聞いて一瞬どうすればいいかわからなくなつた。まさに船に乗ろうとしたとき、不意に大和尚が後ろの方でその様子をはつきり見て、「妖怪め！何をしに来た！」と叫び、禅杖で打ち据えようとする、白娘子と青青は船ごとひっくり返つて水底に消えた。許宣はそれを見て、魂も消え入るほどに驚き、慌てて「あの禅師様はどなたですか？」と人に聞いた。知つてゐる人が「あの方は法海禅師様で、現在の生き仏のような方だ」と答えた。その話が終わらないうちに、禅師は侍者に許宣を連れて来させ、「そなたはどこであの者に会つたのだね？」と許宣に尋ねた。許宣がこれまでの出来事を最初から話すと、禅師は次のように言つた。「前世からの因縁であるといえ、そなたの欲がたいへん深いために、二度三度と迷つてもまだ悟り得ぬのじゃ。今、幸いにしてそなたの災厄は去つた。早く杭州に帰つて、修身して暮らされよ。もしあやつが再びそなたに纏いついたら、湖南の淨慈寺にわしを訪ねてきなさい。このような四句の詩がある。しかと覚えておきなされ。

妖しい蛇が女に化けて 西湖で男に嬌声を売る

汝は欲ゆえ重ねて計に遭う 難あらば湖南に老僧を尋ねよ」

許宣拝謝了禅師、急急回家、果然白娘子与青青都不見了、此時方信二人真是妖精。次早、到針子橋李克用家、把前項事情告訴了一遍。李克用道「我生日之時、被他露出形来、我幾乎被他嚇死。因你怪我而去、我遂不好与你說。今事既已明白、你且搬到我家暫住不妨」。

許宣が禅師に礼を述べて急いで家に帰ると、やはり白娘子と青青の姿は消えており、このとき、

ようやく二人が本当に妖怪であったことを信じた。次の日早く、針子橋の李克用の家へ行き、事のあらましを告げた。李克用は「わしの誕生日のとき、奴が本当の姿を現したのを見て、わしは奴に驚かされて死にそうになった。お前がわしのことを疑って¹⁹行ってしまったので、そのことを言い出しにくかったのだ。真実はもう明らかになったのだから、お前はわしの所へ越してきてしばらく住みなさい」と言った。

過不数日、朝廷有恩赦到来、除十惡大罪、其余尽行釈放。許宣聞赦、滿心歡喜、遂拜謝李克用回家。一到家、即來見姐夫・姐姐、拜了四拜。拜畢、李募事即發話道「兩次官司、我也曾出些氣力。舅舅²⁰、你好無情、怎娶了妻子在外、就不通個喜信兒与我？是何道理？」許宣道「我並不曾娶妻。姐夫此話從那裏說起？」

数日も経たないうちに朝廷から恩赦が下り、十惡の大罪を犯した者を除くすべての者が釈放された。許宣は罪を許されたと聞いて喜びに堪えず、李克用に礼を言つて家に帰つた。家に着くと、すぐに義兄と姉に会つて挨拶をした。挨拶が終わると、李募事は「二度の裁判で俺は力を尽くしてやったのに、お前はなんて薄情な奴だ。外で妻を娶つたというのに、その吉報を俺に知らせないとはどういふことだ？」と言つた。許宣は「妻なんて娶つていませんよ。どこでそんな話を聞いたのです？」と言つた。

正説不了、只見姐姐同了白娘子・青青從内裏走了出來道「娶妻好事、何必瞞人？這不是你妻子麼？」許宣一見、魂不附体、急叫姐姐道「他是妖精、切莫信他！」白娘子因接說道「我与你做夫妻一場、並無虧負你處、為何反聽外人言語、与我不睦？我婦人家既嫁了你、却叫我又到那裏去？」一面説、一面便鳴嗚咽咽哭将起来。許宣急了、忙扯李募事出外去、将前边之事細細説了一遍道「此婦実実是個白蛇精、不知有法可以遣他？」李募事道「若果是蛇、不打緊、白馬廟前有個呼蛇戴先生、極善捉蛇。我同你去接他来捉就是了」。

言い終わらないうちに、姉が白娘子・青青と一緒に中から出てきて、「結婚はよいことなのに、どうして嘘をつくのですか？この方があなたの奥さんじゃないの？」と言つた。許宣は見るなり魂が抜けたようになり、「こいつは妖怪だ！信じてはいけません！」と叫んだ。白娘子は「私はあなたと夫婦になってから一度も背いたことありませんのに、どうして他の人の言うことばかり信じて、私と仲良くしてくださらないのですか？私はあなたに嫁いだのです。それなのに私にどこへ行けと言うのですか？」と言つてむせび泣いた。許宣は慌てて李募事を引っ張つて外へ行き、これまでのことを細かく話し、「あの女は本当に白蛇の妖怪なのです。何か追い払う方法を知りませんか？」と尋ねた。李募事は「蛇ならそんなに心配することはない。白馬廟の前に蛇取りの戴先生という方がいて、たいへん見事に蛇を捕まえる。一緒に先生を迎えに行つて、捕まえてもらおう」と言つた。

二人去時、適值戴先生立在門前、便問「二位有何見教？」李募事道「舍下有一條大白蛇、相煩一捉。先奉銀一兩。待捉蛇後、另又相謝」。戴先生收了銀子、問了住処道「二位請先回、在下隨後即到」。忙裝了一瓶雄黃、一瓶煮的藥水、一徑來到李家。許宣接着指他到裏面房內去捉。戴先生走到房門前、只見房門緊閉、因敲敲門道「有人在此麼？」內裏問道「你是甚人？敢到此內裏來？」戴先生道「我非輕易到此、是你家特請我来捉蛇的」。白娘子曉得是許宣請来捉他、便笑說道「蛇是有一條、只怕你捉他不到²¹」。戴先生道「我祖宗七八代俱出名、叫做戴捉蛇。何況這條把蛇、怎麼就捉不到？」內

裏忽開了門、說道「既會捉、請進來」。

二人が行くと、戴先生はちょうど門の前に立っていて、「何のご用ですか？」と尋ねた。李募事が「私の家に一匹の大きな白蛇がいます、お手数ですが捕まえていただきたいのです。まず銀一両をお支払いして、蛇を捕えてくださったあと、またお札をいただきます」と言うと、戴先生は銀を受け取り、場所を尋ねて「お二人は先にお帰りください。私もすぐ参ります」と言い、急いで一瓶の雄黄と煮込んだ薬を持って李家に行った。許宣が出迎えて蛇のいる部屋を指すと、先生はそこへ捕まえに行った。戴先生は部屋の前まで来て、戸が固く閉まっているのを見て戸を叩き「どなたかいらっしゃいますか？」と言った。中から「どなた？ 何のご用でいらっしゃったのですか？」と尋ねられたので、「勝手に参ったわけではありません。お宅の方が、私に蛇を捕まえるよう依頼なさったのです」と答えた。すると白娘子は許宣が依頼したのだと悟り、笑って「蛇は一匹いますが、おそらく捕まえられないと思いますよ」と言った。戴先生が「私の祖先は七人代にわたっていずれも名高く、蛇取りの戴と呼ばれているのです。一匹の蛇ごとき、捕まえられないはずがありません」と言うと戸が開き、「それならどうぞお入りください」という声がした。

戴捉蛇纔打帳走進去、只見房門口忽刮起一陣冷風來、直刮得人寒毛逼豎。早現出一條吊桶粗的大蟒蛇來、一雙眼睛就是兩隻燈盞、直射將來。戴捉蛇突然看見、喫了一驚、望後便倒²²、連雄黃罐兒・藥水瓶兒都打得粉碎。那蛇張開血紅的大口、露出雪白的牙齒來咬先生。先生見來咬、慌忙爬起來、只恨爹娘少生了兩隻脚、死命的跑出堂前。李募事與許宣迎着問道「捉得如何了？」戴捉蛇道「原銀奉還、蛇是我捉、妖怪如何我捉得？ 幾乎連我性命都送了」。頭也不回、竟跑去了。二人你看我、我看你、無計可施。轉是白娘子叫許宣進去、說道「你好大胆！ 怎敢叫捉蛇的來捉我？ 你若和我好意、便佛眼相看、若不好時、帶累一城百姓、都要死于非命」。

戴先生が帳を上げて入ってゆくと、部屋の入口のところで突然一陣の冷たい風が吹き起こり、寒気で身の毛がよだつほどであった。そこへ一匹の、釣瓶桶ほどの大きさの大蛇が現れ、燈盞のような二つの眼で睨みつけてきた。戴先生は突然それを見て驚き、後ろに倒れ、雄黄の缶や薬品の瓶さえも壊してしまった。蛇は血のように赤い口を大きく開け、雪のように白い歯をあらわにして先生に噛み付こうとした。先生は噛まれそうなところを慌てて這い出すと、両親が二本の足しかつてくれなかったことを恨み、死ぬ思いで家の前まで走り出た。李募事と許宣が迎えに出て「いかがでしたか？」と聞くと、戴先生は「お金はお返しします。蛇なら捕まえますが、どうして妖怪など捕まえられますか。命さえ危ないところでした」と言って、振り返りもせず急いで帰っていった。二人は互いに顔を見合わせたが、何もよい考えは浮かばなかった。そこへ白娘子が許宣を呼んで部屋に來させ、「あなたは本當にひどい人ね！ どうして蛇取りなんか呼んで私を捕まえさせようとするの？ もし私と仲良くしてくれるのなら大目に見てあげますが、もしそうしないのなら、この街の人々にも非業の死を遂げさせますよ」と言った。

許宣聽了、心寒胆戰、不敢做聲、便往外跑、一直跑出清波門外、再三躊躇、却無可奈何。忽想起金山寺法海禪師來、曾分付道「若妖怪再來纏你、可到淨慈寺來尋我」。今無心中走到此間、何不進去求他？ 遂一徑走到淨慈寺來、急問監寺「法海禪師曾到上利來否？」監寺回道「不曾來」。許宣聽說不在、又不敢回家、性急起來、遂走到長橋、看一湖清水道「倒²³不如我死了罷、省得帶累別人」。正要躡身跳時、只見背後有人叫道「男子漢何故輕生？ 有事還須商量」。許宣回頭一看、却正是法海禪師、背馱衣鉢、手提禪杖、却好走來。許宣納頭便拜道「救我弟子一命」。禪師道「這孽畜如今在那裏？」

許宣道「現在姐夫家裏」。禪師因取出鉢盂、遞与許宣道「你悄悄到家、不可使婦人得知、可将此鉢盂頭一罩、切勿手輕、緊緊按住、不可心慌、我自有道理」。

許宣はそれを聞いて心底恐ろしくなり、声も出せないまま外に飛び出し、まっすぐ清波門の外まで走っていき、いろいろ思案したもの結局どうすることもできなかった。そのとき、金山寺の法海禪師が「もし妖怪が再び纏わりついたら浄慈寺まで訪ねて来るように」と言ったのを思い出した。無心にここまでやってきた以上、どうして彼に助けを求めずにいられようか。浄慈寺に着くとすぐ、門番に「法海禪師はお寺にいらつしやいますか？」と尋ねたが、門番は「まだいらつしやいません」と答えた。許宣は家に帰るわけにもいかず、心が急ぎ立ってついに長橋まで来てしまい、湖の澄んだ水を見て「やはり死ぬしかない。他の人を巻き添えにするわけにはいかない」と考え、今にも飛び込もうとしたとき、後ろの方で「男子たるものがなぜ命を粗末にするのか！ 何かあったのならわしに話してみよ」という声が聞こえた。許宣が振り返るとまさに法海禪師であった。背に衣鉢を背負い、手に禅杖を持ち、ちょうど今やってきたところのようである。許宣は頭を下げ、「弟子の命をお救いください」と言った。禪師が「その畜生めは今どこにおるのか？」と尋ねたので許宣が「義兄の家におります」と言うと、禪師は鉢を取り出して許宣に渡し、「お前はこつそり家に帰り、婦人に気づかれないようにこの鉢を頭にかぶせよ。決して手を緩めてはならぬ。しっかりと抑えつけ、慌てぬようにしなさい。わしにはちゃんと考えがある」と言った。

許宣拝謝了禪師回家、只見白娘子正坐在那裏罵張罵李。許宣乘他眼慢、掩²⁴到他身後、悄悄的將鉢盂望白娘子頭上一罩、用尽平生之力、按將下去。漸漸的压下去、压到底、竟不見了白娘子之形。不敢手鬆、緊緊按住。只聽得鉢盂內叫道「我和你數載夫妻、何苦將我立時悶死？略放鬆些、也是你的情」。

許宣が禪師に礼を述べて家に帰ると、白娘子が座って何やらぶつぶつ言っているのが見えた。許宣は隙に乗じて彼女の背後に回りこみ、こつそりと鉢を白娘子の頭の上にかぶせ、すべての力を振り絞って押さえた。ゆっくりと押さえていき、徹底的に押さえきったところで白娘子の姿は見えなくなってしまったが、それでも力を緩めずに強く押さえ込んでいた。鉢の中からはただ、「私たちは夫婦になって何年にもなるのに、どうしてすぐに私を窒息死させようとするの？ 夫婦の情けで少し緩めてちょうだい！」という声が聞こえてきた。

許宣正没法处置、忽報道「外辺有一個和尚、説来収妖怪的」。許宣聽得、忙叫李募事快請進來。禪師到堂、許宣說道「妖蛇已罩在此、求老師發落」。不知禪師口裏念些甚麼、念畢揭起鉢盂、只見白娘子縮做七八寸長、如傀儡一般、伏在地下。禪師喝道「是何孽畜？怎敢纏人？可說備細」。白娘子道「我本是一蟒蛇、因風雨大作、来到西湖、同青魚一処安身。不想遇着許宣、春心蕩漾、按納不定、有犯天條。所幸者、實不曾傷生害命。望老師慈悲」。禪師道「淫罪最大、本不当恕、姑念你千年修鍊²⁵、僅免一死。快現本相！」白娘子乃現了白蛇一條、青青乃現了青魚一尾。那白蛇尚昂起頭來望着許宣。禪師因將二怪置于鉢盂之内、扯下褌衫一幅、封了鉢盂口、拿到雷峰寺前、將鉢盂放下、令人搬磚運石、砌成一塔、压于其上。後來許宣又化緣而成了七層、使千年万載白蛇与青魚不能出世。禪師自鎮压後、又留偈四句道

雷峰塔倒 西湖水乾

江潮不起 白蛇出世

許宣がどうしたものかと思っていると、「外に和尚さまがいらつしやり、妖怪を封じ込めに来た

とおっしゃっています」という知らせがあった。許宣はそれを聞いて、すぐ李募事に頼み、禪師を呼んできてもらった。禪師がその場に着くと、許宣は「妖蛇はこの中にいます。ご処置をお願いします」と言った。禪師は口の中で何やら唱え始め、唱え終わると鉢を開けた。すると白娘子は七八寸の長さに縮んでしまっており、まるで傀儡のように地面に伏せていた。禪師が「お前は何者で、なぜ人にまとわりつくのか詳しく話してみよ」と言うと、白娘子は「私はもともと一匹の蟒蛇でございました。激しい風雨のために西湖に参りまして、青魚と同じところに身を寄せておりましたところ、思いがけずも許宣さまにお会いして、春情が動くのを抑えきれず、天の掟を犯してしまったのです。ただ幸いなことに、私は人の生命を害したことはありません。どうか老師さまのお慈悲をお願いたします」と言った。禪師は「淫の罪は最も重い。本来なら許すべからざることであるが、ひとまずお前の千年の修行に免じて、死だけは許してやろう。早く本来の姿を現せ！」と言った。すると白娘子は一匹の白蛇になり、青青は一匹の青魚になったが、白蛇はなお頭をもたげて許宣を見つめていた。禪師はこの二匹の妖怪を鉢の中に入れ、僧衣を引き裂いて鉢の口を閉じ、雷峰塔の前へ運んで鉢を埋め、人々に煉瓦や石を運ばせてその上に塔を築き、穴をふさいだ。その後、許宣は布施を募って七階建てにし、永久に白蛇と青魚が世に出てこれないようにした。禪師は妖怪を調伏した後、四句の偈を遺した。

雷峰塔倒れ 西湖の水乾き

江潮起こらざれば 白蛇世に出づ

法海禪師頌罷、大衆作礼而散、惟許宣情願出家、就拜法海禪師為師、披剃于雷峰塔下。修行有年、一夕、無病坐化。衆僧買龕烧骨、造骨塔于雷峰塔下。怪蹟雖不足紀、然雷峰自此而成名于西湖之上、故景仰雷峰、又不得不憑弔其怪事云。

法海禪師が偈を唱え終わると、人々は礼をなして帰ったが、許宣は出家を願い、法海禪師を師とし、雷峰塔の下で剃髪した。そして長年の修行の後、ある夕べ、病もないまま遷化した。僧たちは厨子を買って茶毘に付し、骨塔を雷峰塔の下に作った。怪異は記録するに値しないが、雷峰塔はこれ以来、西湖の上に名をなした。それゆえ雷峰塔を仰ぎ見ると、その怪事が偈ばれるのである。

*1 「排行」は同族中の同世代間における長幼の順序のことだが、「小乙」については、若い男性の中での最年長者とする説(『漢語大詞典』など)や、兄弟の順序の二番目とする説(『中国語大辞典』など)がある。ここではひとまず、「若者」と訳しておいた。

*2 底本「募事官」。以下、すべて「募事官」に改める。

*3 「白娘子永鎮雷峰塔」には、許宣が寺に行く前日、寺の僧が許宣の家にやってきて、もうすぐ清明節だから先祖の供養をするようにと言う描写がある。その際、僧は「貧僧は保叔塔寺内僧、前日已送饅頭、並卷子在宅上」と言っており、この場面における「饅頭」はこのことを指していると思われるが、「雷峰怪蹟」では僧のこの台詞が省略されているため、わかりにくくなっている。

*4 「撥」は底本のままだが、意味が通りにくい。「躲」や「縮」の意と解釈して訳した。

*5 清代における各州県の官署の下級役人を「三班」というが、ここにおける「三班」がその意味かどうか明らかでない。ここでは「白三班」とそのまま訳しておく。ちなみに、「白娘子永鎮雷峰塔」の松枝訳は「あたくしは宮中の殿直をつとめております白侍従の妹でございます」、中村・雷訳は「私は殿直をつとめます白三班の妹で」となっている。

また、「雷峰怪蹟」の藤井訳は「妾は白三班ハクサン白直殿の妹で」、田中訳は「私の家は白三班で、私は白直殿の妹で」とする。

*6 底本「直殿」。以下、本文はすべて「殿直」に改める。「殿直」は宋代の官名で、宮廷に仕える武官のこと。

*7 「白娘子永鎮雷峰塔」には「三橋街」とある。

*8 心が浮き立って落ち着かない様を表している。原文の「心猿意馬」は「意馬心猿」に同じで、欲情の抑えられない様子をいう。

*9 底本「到」。

*10 底本「首出」。

*11 底本「番悔」。

*12 これまで「府尹」とあったものが、この箇所以降すべて「太尹」となる。本文は底本のままとし、改めることはしない。

*13 底本「幕事」。以下、同様の誤刻が散見されるがいちいち注しない。

*14 「河港」では意味不明。音が似ている「喝乾」の当て字であろうか。

*15 底本「慰」。

*16 「道」「説」あるいはそれに類する文字が脱落している。

*17 底本「悔」。

*18 底本「灣」。

*19 原文の「怪」は「なじる」の意である可能性もある。

*20 底本は重字を用いる。

*21 底本「倒」。直後の戴先生の台詞における「捉不到」も同様。

*22 底本「到」。

*23 底本「到」。

*24 底本「演」。

*25 底本「修煉」。

【附記一】本来ならば訳文とともに語釈を附すべきであるが、紙幅の都合でかなわなかった。諒とされたい。

【附記二】本稿は、『金沢大学国語国文』三十七・三十八号に掲載した「雷峰怪蹟」試訳（上）（下）のうち、作品の本文とその訳文部分のみを抜粋したものである。

【附記三】翻訳にあたり、上田望先生と徐文輝氏の教示を得ました。ここに記して謝意を示します。